

【巻頭言】



チベットとVR

—チベットでの高僧、科学者との対話—

中津良平

関西学院大学、ニルバーナテクノロジー



少し古い話になるが、昨年7月にチベットを訪問しその自然と文化を満喫した。また、チベットの高名な宗教家・哲学者・医学者とのワークショップを開催して、宗教と科学技術の関係やそれらの融合の可能性について議論した。その概要を記して巻頭言としたい。

筆者は、2002年3月まで国際電気通信基礎技術研究所(Advanced Telecommunications Research Institute, 以下ATRと略記)に在籍し、特にマルチメディアを用いた新しい通信方式、通信システムを研究する部門を率いて基礎研究を行ってきた。携帯メール、カメラ付き携帯に見られるように、新しいメディアは新しいコミュニケーションの方法を生み出す。マルチメディア技術(最近ではITという方が通りがいい)をベースとして、どのような通信メディアが可能で、それがどのような新しいコミュニケーションの方式を生み出すかを研究するのが私の研究所の使命であった。この問題設定に対し、従来は技術者のみでいわゆるシーズ指向の研究が行われるのが通常であったが、それに対し筆者は、むしろ今後重要になるのはコンテンツであり、コンテンツと技術を融合したメディアの開発が必要との基本的考え方を持った。それを実現するためにアーティストを仲間に加え、研究者・技術者とアーティストの共同研究という新しいアプローチを試みた。幸いこの研究(アート&テクノロジー)は種々の成果を生み、国際的にも高く評価された。その過程で筆者は、従来の技術が人間に物質的豊かさを提供してきたのに対し、今後はそれに加え精神的豊かさをも提供することが必要との考えを持つに至った。すなわち、

物質的豊かさと精神的豊かさの融合が必要で、アート&テクノロジーの真の目的はそこにあるのだという直感である。これを延長していくと、当然ではあるが宗教にたどり着く。宗教こそは人間に精神的豊かさを提供するからである。したがって、アート&テクノロジーの先には宗教と科学技術の融合があるのではないだろうか。それが筆者がATRでの研究を通して持ち始めた考え方である。ATRの研究成果を実用化するベンチャを設立したときに、ニルバーナテクノロジーという名前を付けたのも、身体・精神両面で人々を豊かにする技術を提供したいという思いがベースになっている。たまたま、アルラチベット医学センター日本支所が筆者の会社と同じビルに入っており、そこの人達と懇意になってから、チベットを訪問したいという気持ちが高まった。チベットにおいては、中国を通して日本に伝来した仏教とは別のチベット密教という独自の形で仏教が進歩を遂げている。また、チベットにおいては、医学を中心として科学技術と宗教の融合が実現されている。これらの点を実際自分の目で確かめると共に、チベットの宗教家や科学者に筆者の考えをぶつけたいという思いが強まった。今回、アルラチベット医学センターが医療関係者を対象として「学術研究と観光医学の旅」を企画したので、その旅行に参加すると共に、医療関係者の間で行われた研究会・ワークショップとは別に日本側の科学者・技術者とチベットの高名な宗教家・哲学者・医学者とのワークショップを企画した。

まずは、ワークショップに先立ってチベットの自然と文化を知るための観光旅行に出かけた。自然に関して

は、東洋的な景観と西洋的な景観が渾然となっている様に感動を覚えた。切り立った山やグランドキャニオンを思わず深い渓谷はアメリカ的であり、さらには強い日差しの中を青海湖畔をドライブしていると、あたかもアメリカ西海岸をドライブしている感覚にとらわれた。と思うと、一面の菜の花畑や段々畑は、日本の昔の風景を思い出させた。いかにも西洋と東洋の文化が会おうにふさわしい場所という感覚を受けた。また、旅行途中の村では、たまたま年に一度の祭りに出くわした。本来は、村祭りなのに、参加する村人の衣装は豪華であり、その出し物も素朴ではあるがいつまでも見飽きない魅力を持っていた。なによりも、女性・若者が祭りの主人公であり、長老達はそれを温かく見守っているという、古い文化を新しい形で伝承している様に感動した。同じく祭りを鑑賞していたドイツのジャーナリストの「私はこの祭りを見るため、7年前から毎年ここを訪れている、この祭りに偶然出くわすのは非常にラッキーだ、遠からずこの祭りは世界的にも有名になるだろう」との言葉が印象的であった。

さて、旅行も終わりワークショップである。今回は日本からの参加者は、技術者・研究者・メディアアーティストなど技術系を中心とした構成であり、チベット側の出席者は、高僧、高名な医学者・仏教哲学者などから構成されていた。チベット側の出席者がいずれもその分野で高名な人々ということと、平均年齢でも日本側がかなり若いことから、筆者は、ワークショップが、議論の場と言うよりは、チベット仏教・チベット医学に対する単なる質問の場になる恐れを当初持っていた。予期していたとおり、最初は日本側参加者は遠慮もあり、質問が中心であった。そこで筆者は、意識的に日本・チベットにおける仏教と科学技術の関係、さらには21世紀における望ましい両者の関係の方向に議論が進むよう舵取りした。そのせいもあり、議論は徐々に盛り上がった。特に、

筆者が以前から持っていた考えである、「物質・精神両面で人間を豊かにすることが宗教の使命であるが、同時に科学技術の究極の目的もそれであらねばならない、宗教と科学の融合はそれらの実現をより容易にするため望ましい、人間を物質・精神両面で豊かにするためには科学者、技術者は自らが宗教的な成就（仏教の場合は「さととり」）を達成することを目指す必要がある」などの意見を表明したところ、先方が諸手をあげて賛成してくれた。「宗教と科学技術の融合はチベットの古来からの伝統的な姿勢である。そのような考え方がチベットの外で理解されるのは困難と思っていたが、日本の技術者からそのような言葉を聞いてまことに嬉しい」との賛辞も頂いた。最後には、このような考え方を今後全世界に向けて発信していく必要があるとの合意の基にワークショップを終えた。短い時間ではあったが非常に充実した高揚感を覚えるワークショップであった。

一般に、VR技術は人々を現実世界から仮想（虚構）世界へ導くものと考えられているが、前会長の館先生が折に触れて力説されているようにこれは誤りである。筆者も従来から、会社を中心とした現在の社会構造こそ仮想であり、VR技術・マルチメディア技術はむしろ人々を仮想から現実へと連れ戻してくれるものであるとの説を唱えてきた。会社中心の社会が音をたてて崩れつつある現在、やっと人々はこのことに気付き始めているようである。とするならば、私達VR研究者・技術者はさらに先を見通す必要があるのではないだろうか。東洋的風景と西洋的風景が渾然一体となっており、宗教と科学技術の融合が実現されているチベットに、筆者は将来VR技術が実現すべき理想的な社会の一端を見た思いがする。もちろん、理想のIT社会の実際の姿は、基本的理念は共有するにせよチベットとは異なるものになるだろう。私達VR研究者・技術者は、将来の社会のビジョンをも持ちつつ研究を進めて行きたいものである。

【略歴】

中津 良平 (NAKATSU Ryohei)

関西学院大学 理工学部 教授,

1969年京都大学工学部卒業, 1971年京都大学工学部修士課程修了. 1971年日本電信電話公社(現NTT入社).

1990年NTT基礎研究所研究企画部長, 1991年同情報科学研究部長. 1995年ATR知能映像通信研究所代表取締役社長.

2002年より現職. 同時に(株)ニルバーナテクノロジーを設立し代表取締役社長. 専門は、音声処理・

マルチメディア処理. IEEE, 電子情報通信学会フェロー. 著書『自己の表現』(岩波書店, 共著), 『Art@Science』

(Springer-Verlag, 共著) 他.